各茶園の良質な茶葉が集結

7/11

川根本町茶品評会が開催されました

川根本町農林業センターで「令和６年度 川根本町茶品評会」が開催され、手摘みの部６点、機械摘みの部６点が出品されました。

審査員には静岡県志太榛原農林事務所やＪＡ静岡経済連等から専門家４名を招き「外観・香気・水色・滋味」の項目について厳正な審査が行われました。

審査長を務めた農研機構金谷茶業研究拠点の水上裕造（みずかみゆうぞう）上級研究員は、「今年も香りが強く形状が均一、色にもツヤがあり濃緑で川根茶らしい出品茶が揃っていました」と話しました。

結果は、手摘みの部では「相藤農園 相藤直紀」さんが、機械摘みの部では「丹野園 丹野浩之」さんが優等に輝きました。

審査基準に基づき、一点ずつ丁寧に品質を確認する審査員の皆さん

エコティ日記

町の自然資源を活かした地域観光事業に取り組む一般社団法人エコティかわね。今回はヤマセミ生息状況一斉調査の報告をさせていただきます。

南アルプスユネスコエコパーク 10周年に向けて（3）

ヤマセミ生息状況一斉調査（千頭地区）

ヤマセミ生息状況一斉調査（田野口地区）

川根本町に町の鳥、「ヤマセミ」は生息しているのか。６月９日（日）に「ヤマセミ生息状況一斉調査」を行い、その答えは「いる」と断定できたことを報告させていただきます。１地点でペアでいるところを確認。１地点で１羽以上の鳴き声を確認、その他にも「それらしい姿を見た」という情報を頼りに、今回の調査だけでも６羽はいるのでは？とメンバーで話をしています。

現在、ヤマセミは子育てに奮闘中。警戒心がとりわけ高いヤマセミは、子育てが終わるまでは、人が近づくことで雛を放棄してしまう例もあるそうです。ヤマセミはどこにいたのか、という詳細の報告については、子育てが終わって一息ついたとき、また今年の終わりごろに、お伝えできればと思っています。

今回の調査は初めて行ったもので、どれくらいの方が興味を持って下さるのか、参加していただけるのか、始める前はとても不安でした。しかしながら、当日は109名（その内77名が町内、32名が町外）の方にご参加いただきました。年齢でいうと０歳から90歳まで。高い関心を持っていただいたことに感謝いたします。特に昔から大井川を見てきた地元の皆さんには、昔の大井川の様子のお話を各地点でしていただき、参加者の方はとても興味深く聞いていらっしゃいました。大井川に関心を持つこと、これこそが、将来ヤマセミが川根の各地で見られる未来の、第一歩だと思います。

ECO-T KAWANE
（一社）エコティかわね
川根本町桑野山424-6
☎0547（58）7000
FAX0547（58）7001
Eメール：ecotkawane@gmail.com

まちの話題

地域に親しまれる音頭を目指して

6/18

地域の人と輪になって自分たちで作った「川根本町音頭」を踊りました

光の森学園の体育館で地域の人と一緒に「川根本町音頭」を踊る児童

光の森学園の７年生が、総合的学習の授業で「川根本町音頭」の踊りを地域の方々に教えました。

川根本町音頭は、昨年度、本川根小学校の６年生が「町を元気にしたい、地域の人を笑顔にしたい」という思いで制作した作品です。作詞・作曲・振付は児童によるもので、歌詞には、特産品、観光資源、町民の人柄など、本町の良さが盛り込まれています。

集まった約20名の地域の人に７年生がていねいに振付を教え、１年生も踊りの輪に加わりました。

今回の授業は地域の人の要望により実現したものです。参加者の一人は「昨年12月の本小フェスティバルでの踊りに参加して、子どもたちの思いに感動しました。地域に戻って踊りを広めたいです」と話しました。

フレイル予防について学ぶ

7/1

聖隷クリストファー大学の看護学生が地域看護実習を行いました

聖隷クリストファー大学の看護学部４年生３名が、町内で月４回行われているケアラーズカフェに参加しました。

瀬平集落センターに集まった約30名の参加者を対象に「運動習慣を身につけよう！～フレイルって何？～」をテーマとした健康講座を行い、学生考案の「フレイル予防体操」を一緒に行いました。

講座を終えた学生は、「地域の方が、質問にあたたかく答えてくれたので安心して発表できました」と話し、参加者からは「簡単な体操なので家でも手軽にできる。学生から若々しく元気なエネルギーをもらいました」と感想が聞かれました。

発表を行う聖隷クリストファー大学の学生３名と地域住民の皆さん

「まちたんけん」で地域の役割を考える

7/2

三ツ星学園２年生の児童が社会見学を行いました

山村開発センター図書室を見学する児童

三ツ星学園２年生の児童10名が、生活科の授業で役場を見学しました。

地域の商店や役場を見学することで、自分たちの生活は誰がどのように支えているのかということについて、そのヒミツや、町の人の役割を考えることを目的に実施されました。

この日、議場や山村開発センターを見学した児童らは、持参したタブレットで思い思いの印象に残った場面を写真に撮ったり、管理人さんに質問し、メモを取ったりするなど記録をしていました。参加した児童からは「本が9600冊もあってびっくりしました！」「赤ちゃんが生まれて名前を届けると初めて知りました」などの感想が聞かれました。